

# キャリア・パスポートを中核にした 小学校・中学校・高等学校の連携による キャリア教育の意義と課題

橋本祥夫

## 1 問題の背景と研究目的

キャリア教育は、校種を超えて学校間連携を図る実践はほとんど行われていないという指摘がある（文部科学省、2011）。清水・胡多・角田の研究によれば、キャリア教育では、学びを次の学びにつなぐ「学びの発展性」、校種を超えた「学びの継続性」と学びを過去・現在・未来の視点で考える「学びの時間的展望」が重要であるとされている（清水・胡多・角田、2020）。キャリア教育は、自分の将来に向けたキャリア形成が重要となるので、各校種で分断されれば有効なキャリア教育とはならない。児童生徒の人生は学校を卒業しても続くのだが、教師は、卒業するまでの6年間あるいは3年間で完結する教育を行っている。そのためキャリア教育も各校種で完結してしまうのである。

キャリア教育は従来型の進路指導である。進路指導は、就職や進学などの「出口指導」と批判されてきた。「出口指導」では、次の進路が決定することが最も重要であり、その先のことは責任を持たない。そのため、「どこなら入れるか」が重要となり、本人の適性はあまり考慮されず、ミスマッチが起りやすい。中学校、高等学校はこのような従来型の進路指導が幅を利かせ、キャリア教育という言葉だけそれに置きかえられたり、職業調べ、職場体験学習、インターン

シップ、社会人による講演などを形式的に行ったりするだけになってしまっている。

このような各校種で完結する教育の在り方を打破する新たな教育実践が、2020年度から導入されたキャリア・パスポートである。その目的は次のとおりである（文部科学省、2019）。

小学校から高等学校を通じて、児童生徒にとっては、自らの学習状況やキャリア形成を見通したり、振り返ったりして、自己評価を行うとともに、主体的に学びに向かう力を育み、自己実現につなぐもの。

教師にとっては、その記述をもとに対話的にかわることによって、児童生徒の成長を促し、系統的な指導に資するもの。

このように、キャリア・パスポートは小学校から高等学校を通じてキャリア教育を行うために重要なポートフォリオとなる。児童生徒が小学校から高等学校までの自らの学習状況やキャリア形成を見通したり振り返ったりしながら、自身の変容や成長を自己評価するために活用される教材がキャリア・パスポートである（金山、2020）。<sup>1)</sup>

学習指導要領の総則では、小学校から高等学校までの教育活動全体の中で「基礎的・汎用的能力」を育むというキャリア教育本来の役割を

明確にし、小学校・中学校・高等学校のつながりを明確にすることを求めている。

本研究では、キャリア・パスポートを中核にした、小学校・中学校・高等学校の連携によるキャリア教育の意義について考察する。そのうえで、それを達成するための現状と課題について検討する。

## 2 キャリア・パスポートを活用した キャリア教育の意義と課題

キャリア・パスポートの取り組みは2020年度からすべての小学校、中学校、高等学校で始まっている。しかし、児童生徒への指導方法や教師の負担など不安や悩みを持つ教師が増えている（中村，2021）。

小学校と中学校は同じ市町村教育委員会の管轄なので、共通の考え方によりキャリア・パスポートの運用、実施が行いやすい。またこれまでも小中一貫教育が進んでいるので、キャリア・パスポートをもとにさらに連携が進んでいくことが期待できる。一方高等学校は、都道府県の教育委員会の設置が多いので、小中学校と連携が難しい。したがって高等学校は小中学校とは違うキャリア・パスポートの運用や活用をすることとなり、実質的にキャリア・パスポートが活用されないケースが見られる。

全国のキャリア・パスポートを分析した松山（2022）は、その特徴として以下の3点を挙げている。第1に項目の系統性、第2に簡略化の傾向、第3に郷土に基づくキャリア教育の促進である。

第1の項目の系統性については、小学校から高等学校まで、児童生徒自身が自らのキャリア意識の変化に気づき、成長を実感できる工夫がされているレイアウトが見られた。しかし、項目は工夫されていても、生徒にそれを意識する

ような働きかけや振り返りの機会がなければ、有効に機能しない。キャリア・パスポートをどのように活用するのか、指導方法も合わせて検討することが必要である。

第2の簡略化は、教員や児童生徒の負担を軽減するために、全ての学年で2枚の様式に統一されている。キャリア・パスポートの導入により、キャリア・パスポートを書かせることが目的となり、それさえすればキャリア教育をしたことになると考えられるおそれがある。キャリア教育の充実のためには、2枚では収まり切れないポートフォリオが必要となる。学校間で送る正式なキャリア・パスポートは、学校独自のポートフォリオの中から厳選した内容を記載することが望ましい。キャリア・パスポートだけでは、キャリア教育の取組の詳細までは分からないことが課題である。

第3の郷土に基づくキャリア教育の促進は、小学校から高等学校まで一貫して郷土に関する項目が設定されていたことによる。地方自治体では人口確保が課題であり、郷土学習が盛んにおこなわれている。そうした背景がキャリア・パスポートの項目にも影響していると考えられる。小学校、中学校では、小学校区を基準にしても校区が近接しており、地域学習を同じ地域をフィールドに実施しやすく、地域の企業、団体との連携でキャリア教育を行うことも可能である。しかし高等学校では、生徒が通学する範囲も大きくなり、共通した地域を設定することが困難である。しかしキャリア教育を行うためには社会の接点は欠かせないので、学校に近接する地域社会との連携は必要である。小中学校から高等学校への地域学習をどのように移行させていくのが課題となる。

### 3 研究方法

本研究では、小学校・中学校・高等学校におけるキャリア・パスポートの運用実態を踏まえ、キャリア・パスポートを中核にした小学校・中学校・高等学校の連携によるキャリア教育の意義と課題を明らかにする。そのために国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターが2021年3月に発表した「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」をもとにキャリア・パスポート及びキャリア教育の意義と課題を分析する。

#### 4 キャリア・パスポートの有用性

##### 4-1 小学校におけるキャリア・パスポートの有用性

職業に関する体験活動の重要性の観点から、「『キャリア・パスポート』等を活用して体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導」の有無に絞って、学習に対する児童の意識を比較したところ、「キャリア・パスポート」を活用している方が5項目について、カイ二乗検定の結果有意差が見られた。その中の以下の3項目は特に有意差が大きい。①「家での学習に積極的に取り組んでいる」( $\chi^2(1) = 27.864, p < .001$ )、②「授業や学校行事に積極的に取り組んでいる」( $\chi^2(1) = 22.940, p < .001$ )、③「学校での勉強は将来の仕事の可能性を広げてくれると思う」( $\chi^2(1) = 16.007, p < .001$ ) (図1)。①と②は積極的に取り組む姿勢であり、「キャリア・パスポート」の活用により、目的意識をもって積極的に活動する姿勢が身に付くことを示している。③については、「何のために勉強するのか」という勉強する目的意識を持つことができ、主体的な学びができてきていることを示している。

「キャリア・パスポート」の作成が担任の意

識に与える影響という観点から、「キャリア・パスポート」を作成している担任と作成していない担任における、担任がキャリア・カウンセリングとしてどのような実践を行っているか尋ねた設問の回答を比較したところ、3項目ついて「キャリア・パスポート」を作成している担任の方が、有意差が見られた。①「児童に対してこれまでの成長について振り返りをさせている」( $\chi^2(1) = 15.096, p < .001$ )、②「日常生活において、自己の生き方に関して児童に新たな気づきを促している」( $\chi^2(1) = 12.705, p < .001$ )、③「児童と将来の夢や目標について対話している」( $\chi^2(1) = 12.405, p < .001$ ) (図2)。以上のように、「キャリア・パスポート」を記入させることが、児童への働きかけをする機会となっていることが分かる。

また、「キャリア・パスポート」を作成している担任と作成していない担任における、担任から見たキャリア教育の計画・実施に関する現状では、質問した5項目すべてについて「キャリア・パスポート」を作成している担任の方が、有意差が見られた。その中の以下の3項目は特に有意差が大きい。①「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、学習全般に対する意欲が向上してきている」( $\chi^2(1) = 26.800, p < .001$ )、②「児童はキャリア教育に関する学習や活動に積極的に取り組んでいる」( $\chi^2(1) = 17.740, p < .001$ )、③「児童はキャリア教育に関する学習や活動を通して、社会的・職業的自立に向けて本校で育成したい力を身に付けてきている」( $\chi^2(1) = 14.812, p < .001$ ) (図3)。①と②は児童が主体的に学習や活動に取り組む効果が出ていることを示している。③については、キャリア教育本来の目標が、「キャリア・パスポート」の作成により実現できることを示している。

小学校におけるキャリア・パスポートの有用

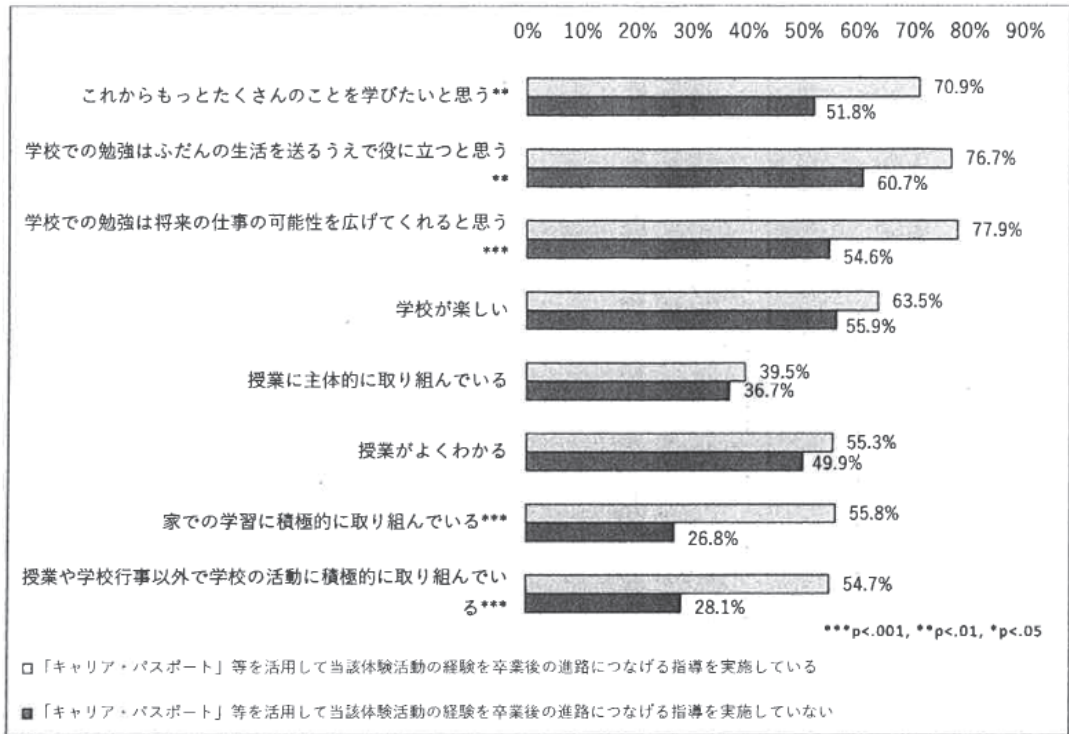


図1 「『キャリア・パスポート』等を活用して体験活動の経験を卒業後の進路につなげる指導」の有無別にみた、学習に対する児童の意識

出典：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.37.

性について、報告書では以下のように述べられている<sup>1)</sup>。

- 「キャリア・パスポート」の作成は、キャリア教育に期待される児童の学習意欲を高めることに影響していると考えられる。
- ・「キャリア・パスポート」の作成は、各学校のキャリア教育の取組を評価し、改善へ結びつける「検証・改善サイクル」の手がかりとなる。
- ・「キャリア・パスポート」の作成はキャリア教育に対する認識の共有や協力体制の構築など、職員間の連携を促進する。
- ・「キャリア・パスポート」の作成は、自己の生き方に関して気づきを促すなど担任による

キャリア・カウンセリングの一層の充実につながる。

- ・「キャリア・パスポート」の作成は、キャリア教育において期待される、児童の学習意欲を高めることに結び付く。
- ・「キャリア・パスポート」に対するフィードバックや振り返りの時間を設けることは、児童に対しては社会的・職業的自立に必要な力に結び付き、保護者に対しては一層の理解や協力へとつながる。
- ・「キャリア・パスポート」に「自己の成長」などの記録内容を含めることで、その教育的効果は一層高まる。
- ・キャリア教育の一層の充実に寄与する「キャリア・パスポート」の教育的効果を共有し、

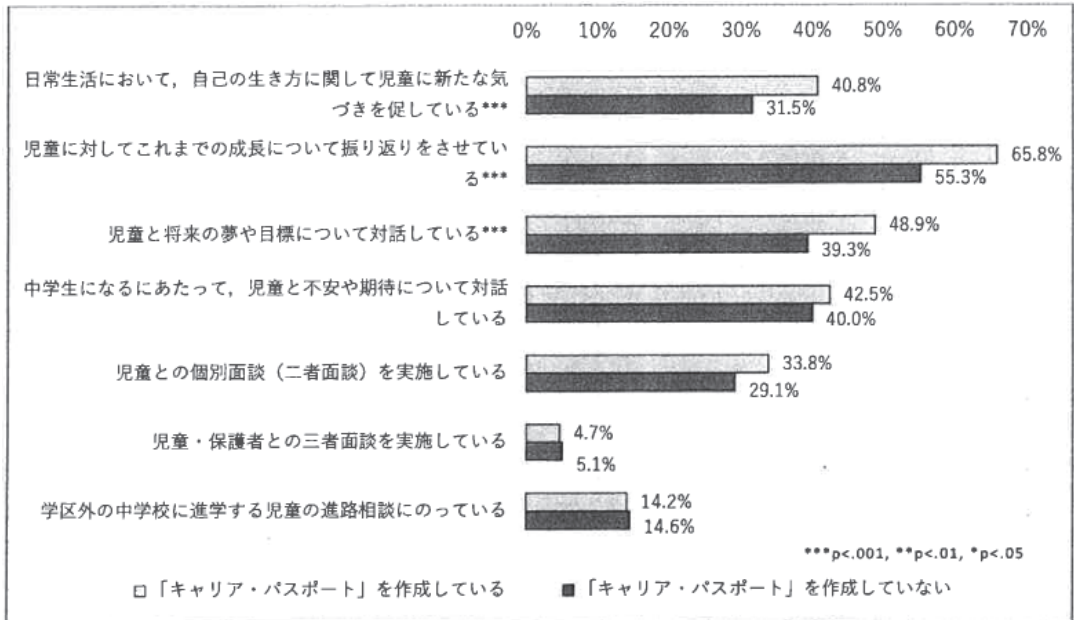


図2 「キャリア・パスポート」作成の有無別の、担任がキャリア・カウンセリングとして行っている実践  
 出典：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.45.

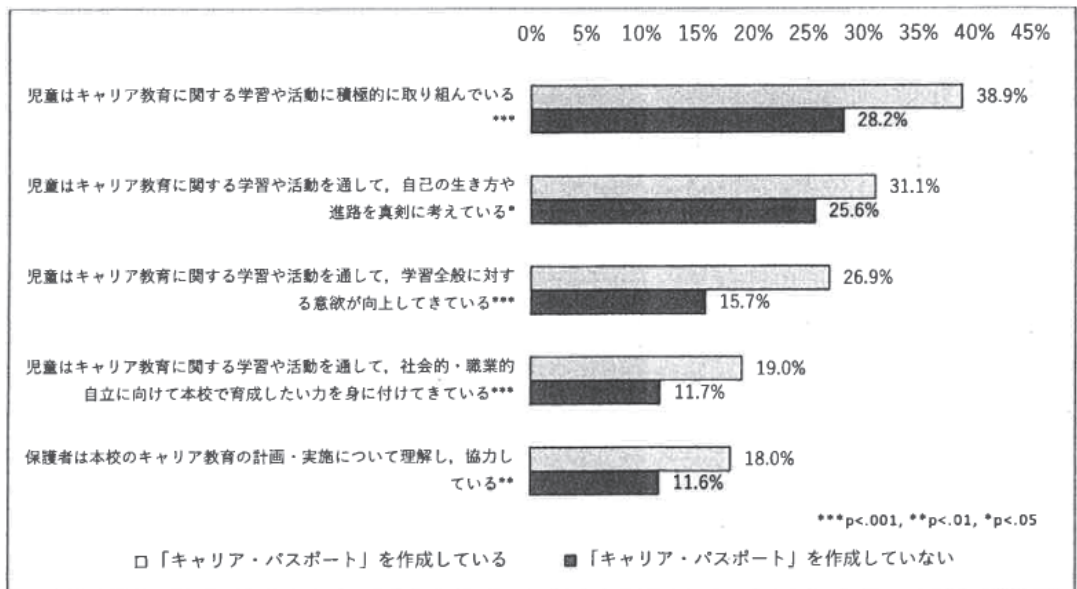


図3 「キャリア・パスポート」作成の有無別の、担任から見た学級や学年の児童や保護者におけるキャリア教育の計画・実施に関する現状  
 出典：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.45.



作成する学校・担任の割合を高めていくことが必要である。

このように、キャリア・パスポートの作成により、キャリア教育で目指している社会的・職業的自立に必要となる力を育成し、児童の学習意欲を高めることになるので、キャリア教育を行っていく上で有用性が高いことが示されている。さらに教育的効果だけでなく、教員の認識の共有や体制の構築などのキャリア教育を実践しやすい状況が生まれ、キャリア教育が充実していくことが期待できる。

#### 4-2 中学校におけるキャリア・パスポートの有用性

「キャリア・パスポート」の活用における生徒との対話的関わりの重要性の観点から、「キャリア・パスポート」を作成している学校に勤務する学級担任と作成していない学校の学級担任について、担任している学級や所属している学年の指導内容について比較したところ、「キャリア・パスポート」を作成している学校の担任の方がキャリア発達を意識した指導をしており、有意差が高かった。調査した15項目すべてにおいて、 $\chi^2$ 検定の結果有意差が見られた。その中の以下の3項目は特に有意差が大きい。ここでは、「よく指導している」と回答した割合を取り上げて比較した。①「様々な立場や相手に対して、その意見を聴き理解しようとすること」( $\chi^2(1) = 208.601, p < .001$ )、②「自分の果たすべき役割や分担を考え、周囲の人と力を合わせて行動しようとする事」( $\chi^2(1) = 129.350, p < .001$ )、③「自分の興味や関心、長所や短所などについて把握し、自分らしさを発揮すること」( $\chi^2(1) = 129.181, p < .001$ ) (図4)。以上のように、「キャリア・パスポート」を活用して、学校としてキャリア教育に取り組

むことで、教員のキャリア教育の意識は高まり、結果として生徒により良い教育を実践することができる。つまり、キャリア教育を学校全体で取り組むことにより、教員としての資質向上にもなる。

中学校におけるキャリア・パスポートの有用性について、報告書では以下のように述べられている<sup>2)</sup>。

- 「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任は生徒のキャリア発達を意識した指導に取り組んでいる。
- ・管理職と学級担任は「キャリア・パスポート」に対する重要性を認識している。
- ・「キャリア・パスポート」の作成や活用に関する改善の必要性を管理職は感じているが、校内研修の実施率及び学級担任の校内外への研修参加率はいずれも1割未満である。
- ・「キャリア・パスポート」を作成している学校は半数未満であり、今後の作成・活用が望まれる。
- ・生徒は自身の適性理解や進路選択の考え方や方法の理解を希求していることから、「キャリア・パスポート」を活用しながら教員が対話的に関わる事が可能である。
- ・「キャリア・パスポート」を作成している学校の学級担任は、生徒のキャリア発達を意識した指導に取り組んでいる。
- ・「教科における学習の記録・振り返り」を記載している場合、生徒の学習意欲の向上やキャリア教育に関する学習や活動への積極的な取組姿勢を学級担任が実感している。
- ・「キャリア・パスポート」の重要性を認識している担任の学級生徒は、自身の「基礎的・汎用的能力」を高く自己評価しており、今後の「キャリア・パスポート」の適切な活用が求められる。

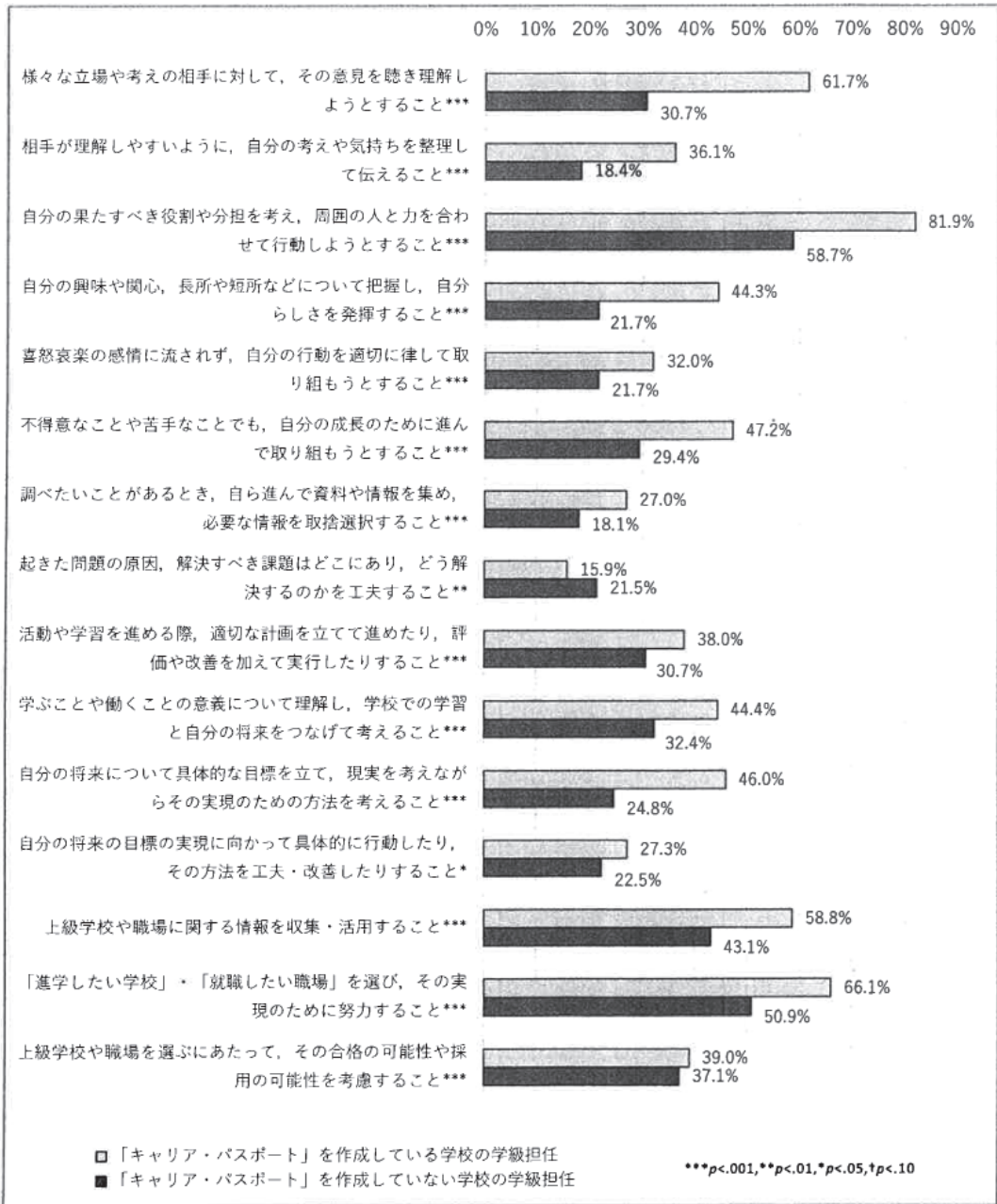


図4 「キャリア・パスポート」の作成有無別にみた学級担任の指導内容（学校調査・学級担任調査）

出典：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター（2021）「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.81.

中学校でも、キャリア・パスポートの活用により、生徒の学習意欲の向上やキャリア教育に関する学習や活動への積極的な取組姿勢が生まれ、キャリア教育を行っていく上で有用性が高

いことが示されている。しかし担任による差が大きく、校内研修の実施率及び学級担任の校内外への研修参加率はいずれも1割未満であることから、学校全体の取り組みとして充実させて

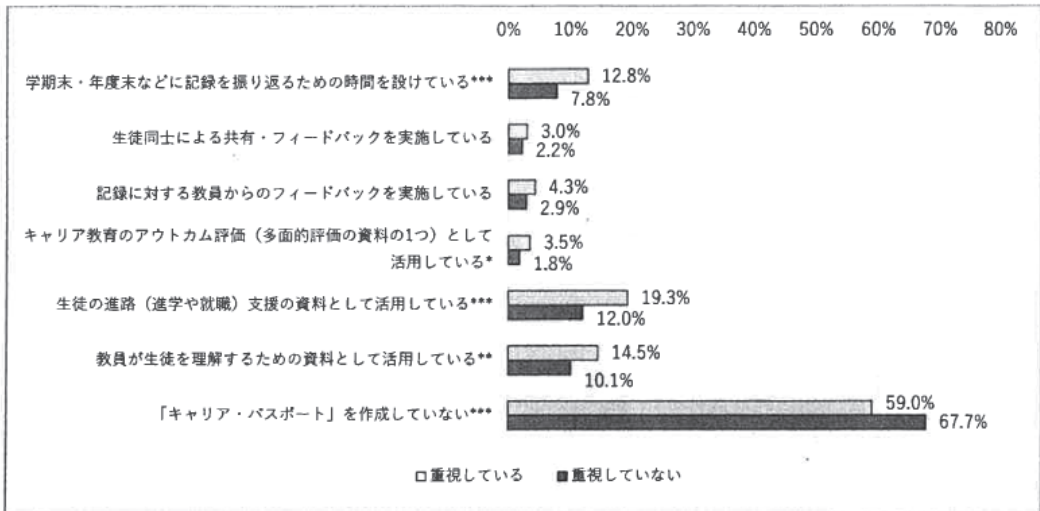


図5 全体計画での「『キャリア・パスポート』等に基づく指導」の重視と担任の「キャリア・パスポート」の作成・活用 ※複数回答可

出典：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.117.

いくことが課題である。

#### 4-3 高等学校におけるキャリア・パスポートの有用性

「キャリア・パスポート」の作成・活用の観点から「キャリア・パスポート」の活用状況を調査した。しかし、キャリア教育を重視している学校でも41%、キャリア教育を重視していない学校では32.3%しか「キャリア・パスポート」を作成しておらず、活用状況の調査結果としては高校の全体像を示しているとは言えない。

「キャリア・パスポート」を作成している学校と作成していない学校を比較すると、5項目について、カイ二乗検定の結果有意差が見られた。その中の以下の2項目は特に有意差が大きい。①「生徒の進路（進学や就職）支援の資料として活用している」（ $\chi^2(1) = 19.438, p < .001$ ）、②「学期末・年度末などに記録を振り返るための時間を設けている」（ $\chi^2(1) = 13.342, p < .001$ ）（図5）。①については、「キャリア・パスポート」を進路指導に活用すること

により、「どこなら入れるか」という「出口指導」に留まらず、生徒の希望や適性に応じた進路指導をより積極的に行える可能性がある。高校がさらに「キャリア・パスポート」を活用するためには、高大接続の観点から、大学入試が学力試験偏重から脱却し、生徒の個性や適性とのマッチングを図るための大学入試に移行することが必要である。

高等学校におけるキャリア・パスポートの有用性について、報告書では以下のように述べられている<sup>3)</sup>。

○ホームルーム担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」ことが、生徒の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」学びのレリバンス意識に影響していることが考えられる。

・生徒は自分の個性や適性を考える学習の指導を希望している。

・「キャリア・パスポート」を実施していない学校は学校調査で約半数、担任調査で約2/3



である。

- ・全体計画で「[キャリア・パスポート]等の活用」を重視する学校でも、全般的にみれば担任の指導にはまだ影響していない。
- ・全体計画で「キャリア・パスポート」等に基づく指導を重視する学校では、担任の「キャリア・パスポート」の作成・活用は進んでいる。
- ・担任が「キャリア・パスポート」を「生徒の進路支援の資料として活用している」クラスでは、生徒の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」は高く、学びに対して前向きであり、学びのレリバンス意識も高い。

高等学校では、キャリア・パスポートの活用により、生徒の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」などの学びのレリバンス意識が高くなり、キャリア教育としての有用性が高いことが示されている。小学校、中学校でのキャリア・パスポートを活用したキャリア教育の成果を知ることにより、高等学校でもその指導を継続し、充実したキャリア教育を行うことが求められる。生徒は自分の個性や適性を考える学習の指導を希望しており、高等学校においてもキャリア教育の充実が必要である。

## 5 各学校種の比較分析による キャリア教育の実態と課題

### 5-1 学校・教員の取組と児童生徒の「学びのレリバンス意識」

各学校種調査結果の比較分析で用いた調査票で、報告書では以下のように述べられている<sup>4)</sup>。

- 各校種段階や学校の特性に応じたキャリア教育の実践が、児童生徒の「学びのレリバンス意識（学ぶことについて将来とのつながりや

意義等について考える意識)」に影響していると考えられる

- ・小学校においては、キャリア教育に関する授業実践が実施されている学校や、将来について具体的な目標を立てることなどについて学級担任による働きかけがある学校の児童の「学びのレリバンス意識」が高い。
- ・中学校では、キャリア教育目標に基づき、体験活動に関する実践がなされている学校の生徒で「学びのレリバンス意識」が高いと考えられる。
- ・高等学校に関しては、学校の特性等の違いによりキャリア教育に関する取組状況が異なると考えられるため解釈が難しい部分もあるが、「学びのレリバンス意識」に関し、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」や「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」が重要であることが示唆される結果が得られた。

「学びのレリバンス意識」に関する項目について児童生徒の肯定的な回答の項目数を比較したところ、3個以上該当すると回答した児童生徒は、小学生48.4%、中学生43.1%、高校生33.1%であり、どの校種も0個から2個までの回答よりも一番多い割合になっている（図6）。以上のように、小学校、中学校、高等学校の各校種で、「学びのレリバンス意識」の向上が見られる。これは、キャリア教育に限らず、教育課程全体で求められる「学びに向かう力・人間性等」に必要な資質である。つまり、キャリア教育は「学びに向かう力・人間性等」の資質を身に付けるために必要不可欠な教育活動であると言える。

「学びのレリバンス意識」は小学校の漠然とした将来への展望や学習意欲から、中学校、高

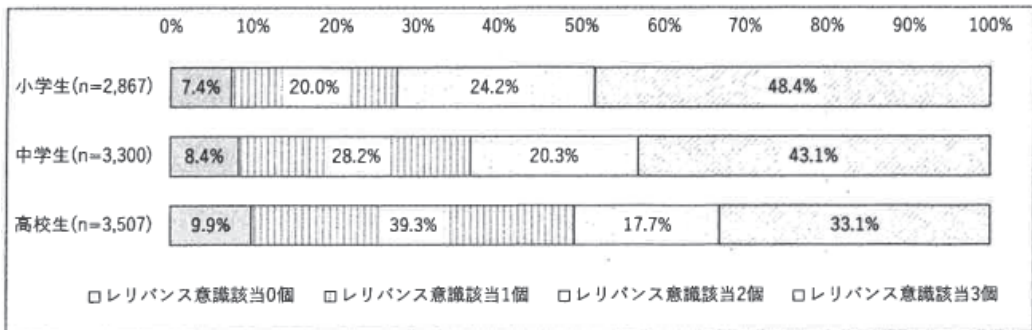


図6 「学びのレリバンス意識」に関する項目についての児童生徒の肯定的な回答の項目数の分布  
 出典：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.122.

等学校と進むにつれ、具体的、個別的なキャリア発達となり、個人の進路選択に結びついていく。キャリア・パスポートを活用することにより、児童生徒の「学びの履歴」を知ることができ、児童生徒に適切なキャリア・カウンセリングを行い、支援することができる。

高校生よりも中学生、中学生よりも小学生の方が、リバンス意識が高くなっているという傾向から、小学生のうちからキャリア教育を実践することが重要であると言える。

## 5-2 学校・教員の取組と児童生徒の「課題対応能力」

各学校種調査結果の比較分析で用いた調査票で、報告書では以下のように述べられている<sup>5)</sup>。

- 各学校段階に応じたキャリア教育の実践が、児童生徒の「課題対応能力」と関連を有すると考えられる
- ・小学校においては、全体計画に「キャリア教育の全体目標」が盛り込まれること、「進路や生き方に関する話し合いやパネルディスカッションの実施」などの授業実践を行うこと、学級のキャリア教育の計画が児童のキャリア発達の課題に即して作成され、また、計画に基づいてキャリア教育を実施すること、

児童に成長について振り返りをさせる学校の児童の「課題対応能力」が高い。

- ・中学校においては、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」を盛り込むこと、「職場の訪問や見学、職業の調査・研究活動」「事業所や上級学校での体験活動にかかわる事前指導・事後指導」を実施すること、学級におけるキャリア教育で「キャリア・カウンセリングを実施している」こととこれに関連してキャリア・カウンセリングの中で生徒に自身の成長の振り返りを促すこと、加えて、「起きた問題の原因、解決すべき課題はどこにあり、どう解決するのかを工夫すること」「活動や学習を進める際、適切な計画を立てて進めたり、評価や改善を加えて実行したりすること」を学級担任が指導する学校の生徒で「課題対応能力」が高い。
- ・高等学校においては、全体計画に「キャリア教育の成果に関する評価方法」が盛り込まれていること、年間指導計画に「キャリア・カウンセリング」が盛り込まれていることが教員の指導を通じて生徒の「課題対応能力」の能力実感に作用している可能性がある。

「課題対応能力」として「いつもそうしている」と回答した該当項目数に着目し比較したとこ

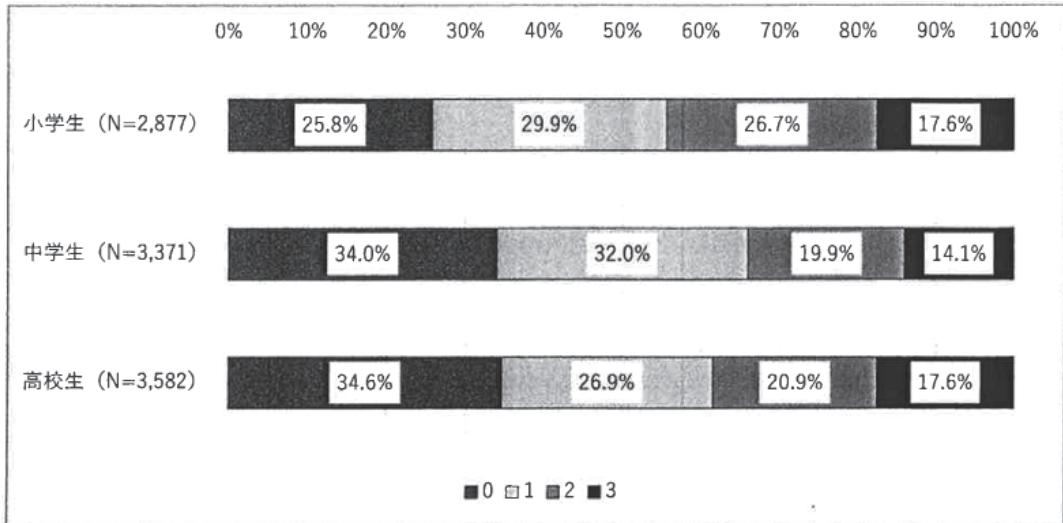


図7 課題対応能力に関する項目に「いつもそうしている」と回答した項目数の分布

出典：国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター(2021)「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.136.

る、小学生、中学生、高校生に特に大きな違いは見られなかった(図7)。

「予測困難な時代」において、これからの社会では「課題対応能力」は極めて重要である。キャリア教育でも重点的な資質能力といえよう。「課題対応能力」の育成には、各校種とも学校の全体教育が重要であるという調査結果が出たことが非常に興味深い。「課題対応能力」の育成は個々のカリキュラムや指導内容に関係すると考えられる傾向が強いからである。全体計画を作成し、年間指導計画に位置付けないと「課題対応能力」を十分に育成できないということから、個々の教員に任せだけのキャリア教育では効果がないことが明らかになった。

## 6 まとめ

小学校では、キャリア・パスポートにより、児童の学習意欲を高めることに影響していることが分かった。各教科の学びと連動し、「何のために学ぶのか」を意識できるのがキャリア教

育である。中学校では、キャリア・パスポートにより、学級担任は生徒のキャリア発達を意識した指導に取り組んでいることが分かった。個々の生徒に応じた「個別最適な学び」を実現するために、キャリア教育は重要な役割を果たす。高等学校では、キャリア・パスポートを生徒の進路支援の資料として活用することで、生徒の「人間関係形成・社会形成能力」「課題対応能力」学びのレリバンス意識に影響していることが分かった。単なる「出口保障」の進路指導ではなく、生徒にキャリア発達や個性に応じた指導をすることにより、より望ましい進路選択ができる。そのことが「学びのレリバンス意識」につながっている。

このように、各校種の発達段階に応じたキャリア教育の違いはあるが、一人の個人の成長過程で、キャリア形成はつながっている。キャリア・パスポートで「学びの履歴」を振り返り、望ましい進路選択をしていくことが必要である。校種間の比較でも、各校種段階や学校の特性に合わせたキャリア教育の実践が、児童生徒の

「学びのレリバンス意識」に影響している。また、各学校段階に応じたキャリア教育の実践が、児童生徒の「課題対応能力」と関連していることも明らかになった。したがって、小学校、中学校、高等学校の各校種が連携したキャリア教育が必要である。

キャリア・パスポートはすべての小学校、中学校、高等学校で作成しなければならない。これを児童生徒も教員も「やらされている」と受け止めては、効果が出ないのは当然である。本研究では、キャリア・パスポートを中核にし、小学校・中学校・高等学校が連携したキャリア教育により、教育効果が高いことを示した。キャリア・パスポートは小学校から高等学校を通じてキャリア教育を行うために重要なポートフォリオとなる。「どうせするなら意味のあることを」という消極的な理由であっても、本研究で示した内容を理解すれば、教員も積極的にキャリア・パスポートを活用したキャリア教育を実践できるのではないだろうか。

## 引用文献

- 1) 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター (2021) 「キャリア教育に関する総合的研究 第二次報告書」, p.42.
- 2) 同上, p.76.
- 3) 同上, p.112.
- 4) 同上, p.121.
- 5) 同上, p.134.

## 参考文献

金山元春 (2020) 「進路指導・キャリア教育とはーキャリア・パスポート導入期にあらためて考えるー」 天理大学教職教育研究 3, pp.29-35.

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター (2021) 「キャリア教育に関する総合的研究 第二

## 次報告書

中村充宏 (2021) 「特別活動におけるキャリア・パスポートの活用に関する一考察」 広島工業大学紀要教育編第 21 巻, pp.19-26.

清水・胡多・角田 (2020) 「初等中等教育におけるポートフォリオを活用したキャリア教育の現状と課題ー学びの継続性, 時間的展望, 発展性と学びの評価の観点からの考察を通してー」 愛知教育大学教職キャリアセンター紀要 vol.5, pp.49-58.

松山康成 (2022) 「小学校・中学校・高等学校におけるキャリア・パスポート活用の実際と進路指導・キャリア教育との関連

文部科学省 (2011) 中央教育審議会「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について (答申)」

文部科学省 (2019) 「「キャリア・パスポート」の様式例と指導上の留意事項」

*Abstract*

## Through cooperation between elementary schools, junior high schools, and high schools centered on Career Passport Significance and Issues of Career Education

Yoshio HASHIMOTO

Keywords: Career Education, Career Guidance, Career Passport

In Career Education, there is almost no practice of inter-school cooperation beyond the boundaries of schools. Career Education is important for career development for one's future, so if it is divided at each school, it will not be effective Career Education. Children's lives continue after they graduate from school, but teachers provide a complete education until they graduate. Therefore, Career Education is completed at each school.

The Career Passport introduced in 2020 is a new educational practice that breaks through the way education is completed at each school.

In this research, we will consider the significance of Career Education through collaboration between elementary, junior high, and high schools, with the Career Passport as the core. After that, the current situation and challenges to achieve it will be examined.